

アジアで会う *Talking in Asia*



名取美穂さん デザイナー・児童養護施設を運営

第540回 何があっても子どもたちを守り抜く(タイ)

なとり・みほ 東京生まれ。ドイツの大学を卒業後、グラフィックデザイナーとして現地の広告代理店で働く。1993年に帰国。スイス系テキスタイルメーカー勤務を経て独立後、母、名取美和さんがタイ北部のチェンマイ郊外に設立した児童養護施設「バーンロムサイ」の運営に携わる。2011年からNPOバーンロムサイジャパン(神奈川県葉山町)の代表。



名取さんとドイツの縁は深い。名取さんの祖父で、著名な報道写真家だった名取洋之助氏がキャリアを出発したのがドイツだった。母の美和さんは16歳でドイツに渡り、商業デザインを学んだ。

名取さんも、日本国内のドイツ系インターナショナルスクールで幼少期から高校までを過ごし、ドイツの大学を卒業した後も地元の広告代理店で働いた。

名取さんは「日本にいながら日本について何も知らなかった」と帰国し、スイス系企業の日本法人で勤務。3年後、「もっとクリエイティブな仕事がしたい」との思いから、フリーのデザイナーの道を歩み始めた。

独立して間もない名取さんは、2人のドイツ人に会おうとチェンマイを訪れる。1人はスイス系企業のチェンマイ工場の工場長で、カーテンマイスターと呼ばれた男性。市場を案内され、ラオスやミャンマーといった隣国だけでなく、インドや少数民族が生活するタイ北部から集まってくる生地の独特の色合いに、チェンマイでのモノづくりに可能性を感じた。

もう1人は、母校の学校医だった女性で、リタイア後はチェンマイの寺でエイズウイルス(HIV)に感染した末期患者をケアするボランティアの仕事をしていた。治療薬もなく、ただ患者をみとるしかない中、患者の手を取って死を迎える心の準備をサポートする元学校医の姿に深い感銘を受けた。名取さんは「寺には棺おけが積み上がり、まるで野戦病院のようでした」と当時を振り返る。

母が養護施設を設立

チェンマイの光と闇に触れた名取さん。母の美和さんは、わずか2週間の訪問で娘の人生を揺さぶるほどの衝撃を与えたチェンマイに関心を持ち、自ら足を運んだ。当初は短

期の滞在のつもりだったが、現地で出会ったHIV感染者の女性に「心配ない。残される子どもは私が面倒を見るから」と約束したことがきっかけとなり、1999年にHIVに感染した孤児たちの生活施設「バーンロムサイ」を立ち上げる。設立に当たっては、イタリアの高級ブランド「ジョルジオ・アルマーニ」の日本法人から支援を受けた。

バーンロムサイとは、タイ語で「ガジュマルの木の下の家」という意味。大きくどっしりと大地に根を張ったガジュマルの木は、暑い時には日陰を、雨が降った時には雨宿りの場を人々に与える。子どもたちが安心して暮らし、学び、遊べる場としてのホームの継続した運営に向けた母娘の奔走が始まった。

東日本大震災が転機

名取さんはデザイナーとして、開園当初からホームのロゴを担当するなど、クリエイティブな面から母を支えた。2001年には養護施設の敷地内にある縫製場で衣類、雑貨などのモノづくりを始めた。バーンロムサイの運営を財政面で支えるだけでなく、HIVに感染した孤児たちが施設を卒業した後に経済的に自立できるように手に職をつけさせたいという思いもあった。

名取さんは11年の東日本大震災を機に自社ブランドでのモノづくりを本格化させ、商品企画に一層の力を入れ始めた。それまで運営費の7割を占めていた寄付が集まらなくなったためだ。縫製場で完成した商品の8~9割は日本に輸出して神奈川県鎌倉市にある実店舗やオンラインで販売している。

ところが、一難去ってまた一難。コロナ後の事業再開時には、17人いた縫製場のスタッフは6人に減少し、生産量は大きく落ち込んだ。美和さんが22年に活動の一線から退く中、名取さんは日本でのモノづくりを決断。日本やタイで、イベントスペースを活用したポップアップストア(期間限定店)での販売などを通じて、危機を乗り切った。

初の同窓会を開催

バーンロムサイでは4月19~20日、25周年を記念して卒園生の同窓会を初開催する。養護施設に隣接する宿泊施設「resort hoshihana(リゾート・ホシハナ)」を貸し切って開催する。リゾート・ホシハナは04年に支援者から寄付されたコテージを宿泊施設として活用したところから出発した。現在は、11棟のコテージが立ち並び、名取さん自らが設計して趣向を凝らしたものもあり、モノづくりと共にバーンロムサイの運営を財政面で支えている。

11年からバーンロムサイに、さまざまな事情で孤児となってしまう子どもたちや親と一緒に生活できない子どもたちも入園してくるようになった。これまで卒園した子どもは60人。最年長の卒園生は33歳となる。

「何があっても子どもたちを守り抜いていきたい」と決意を新たにされた名取さん。これからも幾多の試練を乗り越えていく。(ベトナム編集部・坂部哲生)